北海道医歌人会詠草

人体解剖学Ⅱ

士別　竹内　幹夫

軽く押し指を滑らせまた放す　ドラッグのやう君をなぐさむ
幼子のやはき頬突く優しさで　いのちを産みぬフリックの指
生れし刻羽根はありきと君は言ふ　背をかき遣りてそを確かめぬ
繋がれぬ千の掌を持つ観世音　その寂しさが頬過るとき
ブラキウム手に非ずして腕の名　隠すに非ず胸掻き抱く

人生の先輩たち

滝川　村田　英俊

黙々と日がな編物する老女誰のためかと問うてもみたし
またひとりお相撲好きが加わった知識だけなら大関級
怒るけどいつも明るいお婆ちゃん戦争話には涙するが
夕闇の車窓に一人の老人が私をすばやく真似して動く
柳絮飛び介護施設の庭に舞う身罷りし人の魂ならん

キク

札幌　浜島　泉

庭植えのキク次々と蕾なす　花色がまた異なる趣き
白菊と黄菊が咲きて雪が舞ふ　根雪に備へダンプ持ち出す
紅葉の山が朝日の　紫の光を受けて輝く錦
穏やかな日差しが陰り　暗き雲早く走りて微細の雪が
天満宮の絵馬に戦さが終わるやう　日差しは温し風は冷たし

受難

釧路　児玉　昌彦

腰椎の圧迫骨折という思わざる米寿の年に当りし大厄
一瞬の不注意と加齢重なりて画像にあざやかひしゃげた椎骨
痛みこらえ起居動作さえ恐ごわともはや自認の障害老人
コルセットの鎧身につけ椅子に寄るつかの間浴びる短き冬の陽
齢とるということは相応の負と孤を背おう覚悟あらねば

冬…

北広島　古屋雅三知

しんしんと雪降り頻る　窓の外エスコンの灯も遠く霞みて
積雪の下の氷に足取られ歩幅狭めて一歩歩めり
冷え込みは細く小さく咲かすなり　枯れ木の先に花の如くに
子らの声弾む隣家の庭先の雪に映えたり　イルミネーション
夜半に降る横殴りなる雪の量　明朝電車はまた止まるらむ

春待暦

函館　水関　清

大声を出して詰め寄るなまはげを　睨みつつ児は　父よぢのぼる
沈黙といふ名の錘下ろし来て　瞳の深さ　測り合ふ夜
陸別の夜は特別星は降る　空を舞台に　踊りつつ降る
悔いなしと言ひ切る友に　寒造　塩盛りし枡つぎつぎ空に
「神酒の海」　餅つき兎の耳のそば　長旅ＳＬＩＭは顔から着地